

昨年の2月13日（月）、月1回の新聞休刊日の朝方、久しぶりに焚き火小屋の囲炉裏に火を入れ、暖をとりながら、あれやこれやとその日の予定を考えていると、教育会の赤羽孝之さんから連絡があって、今牧久先生の訃報に接した。信じられない思いのまま経緯を確かめると、昨夜倒れたらしく、零時を回ってから死亡が確認されたという。

信じられないのに理由はあった。4日前の9日（木）の夕方、珍しく今牧先生の方から電話があ

って、「お前さんは大正昭和の人の雅号を調べていたな。今、調べて、書こうとしている教育会にある掛軸に一人わからない雅号があるが、わからないかな？」という内容である。仕事上行き当たる近世の行政文書は無論、わからない崩し字があると、仕事にかこつけ今牧先生のところに駆けつけ、その問題解決は無論だが、周辺の蘊蓄を承ることを無上の楽しみにしてきた昨今だった。ただしそれは一方通行で、先生からそうした質問を承ることはなかった

追悼 今牧久先生の一週忌

「夕狩」の思い出

嶋 不 濁

についてだった。

和室に飾られた軸は、昭和32年11月17日の市村威人と西尾

一夜を過ごした様子がうかがえる。そこに「夕立の過ぎにしの後の杉木叢かなかなの声一きは高し 夕狩」の短歌が記されている。今牧先生ならずとも、この雅号が気になるところである。



下平羊我（向かって左端）



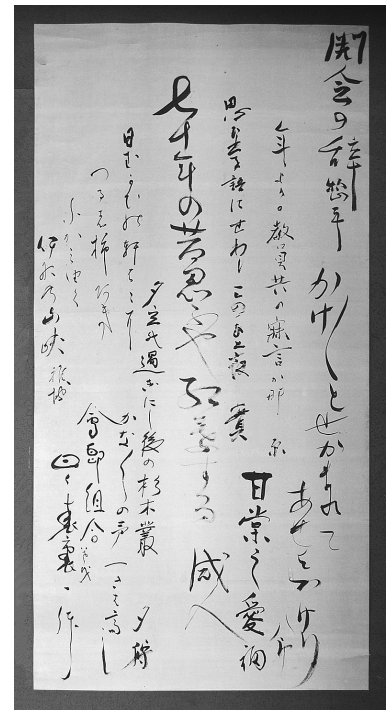
第2回児童自由画展覧会の折（上段右端が夕狩）

水の本家で撮影された写真の紫水の左隣に下平羊我がいることがすぐにわかった。さらに会場（追手町小学校？）で撮られた写真には下平羊我の真後ろに林誓の姿も確かに確認できた。

まだまだ調査は始まったばかりであるが、今牧先生の石橋を叩いて渡る慎重さを肝に命じてコツコツやるしかない。

後日、今牧先生の奥様から、先生の「書き残した日記があり、名前が書いてある」と連絡をいただいた。今牧先生の慎重な仕事ぶりを、なんでも短兵急に結果を急ぎたがる自身の戒めによろと思

って、その日記を写真に撮らせてもらった。



下伊那教育会館の寄書き

辞」があり、「かけかけとせがまれてあせをかけり」と松島八郎、「年よりの教員共の寝言か那」と原太一、「思ひ出を語にせわしこのひと夜」と西尾実、「七十年の昔思ふや紅葉する」と市村威人が応じる。他にも、宮下功、牧内雅博、福島豊らが、苦楽を共にした月日を思い、楽しい

一夜を過ごした様子がうかがえる。そこに「夕立の過ぎにしの後の杉木叢かなかなの声一きは高し 夕狩」の短歌が記されている。今牧先生ならずとも、この雅号が気になるところである。

で、翌10日（金）教育会館の朝茶の折に赤羽孝之さん相手にその話をされたそうである（下伊那教育会「会報」第495号及び「伊那」1071号参照）。そんな話を交わしたばかりだったので、赤羽さんの電話（訃報）は夕子の悪い冗談にしか聞こえなかった。何度も聞き返して、赤羽さんには悪いことをした。

その夕狩こと林誓（誓）が、彫刻家・林湜和氏のご尊父であることは、その折、今牧先生からご教示いただいた。実は、明治後期の『伊那青年』の復刻出版に目処がついたので、次の大正期の『夕樺』の調査に入

っていて、大正期の竜丘小学校（下平芳太郎校長）の自由画運動とキリスト教の影響を考えていた矢先だった。調査がようやく木下紫水の同僚の下平羊我（義臣）の遺族に辿り着いたばかりの時だった。調査対象には同じ竜丘小学校に奉職した夕狩が林湜和氏の父であることがわかり、調査の方向が見えてきたのだ。下平芳太郎や小林洋吉（春風）、代田一郎（牧羊）、木下紫水（茂雄）、小島良造ら主要な人物の面は割

れているが、橋爪福弥（白川）や小林八十吉、下平保吉、下良夫を迎え、木下紫